豆の町（ビーンタウン）から こんにちは（第9回）

会員家族　住井　円香

■寮生活で異文化を学ぶ、グローバルハウス

前回軽く触れさせていただいた、私が所属している様々な言語を学ぶ学生が同じ寮に暮らすプログラムについて、今回も少しお話します。

前学期、私は日本語や日本文化を学び、大学全体に紹介するためのチームの他に、異文化体験について考える週一回の授業にも参加しました。

そこでは、直接的にコミュニケーションをとるか、それとも間接的な表現を好むかどうか、言葉を発さなくてもジェスチャーや暗黙の了解を基に意思疎通が成立する高文脈文化と、対照的に言葉にされていない内容は伝わらない低文脈文化など、文化の比較に使われる指標を学びました。

私を含め受講者は3人しかいない、こじんまりとしたある意味とても贅沢な授業を通じて、どんなことが異文化コミュニケーションにおける妨げや誤解につながるのかということを考え続ける機会になりました。

仮に一つの文化圏では評価される行いであっても、別の文化圏では眉をひそめられる行動に変わってしまったりすることも学んだほか、国や地域によって、歴史的背景の違いから、大切にするものが異なることを議論しました。例えば、自分が育った文化圏で「一番連帯感が強まる瞬間」という話題では、ロシア人のクラスメイトは、ロシアがナチスによる侵攻に勝利した日を大事にし、その日が一番コミュニティ内での結束が強まることを話していました。

彼女はウクライナに対する自国ロシアによる侵攻には、強い嫌悪感を露わにしつつも、多くのロシア人がウクライナへの自国の攻撃を正当化する背景には、こうした過去の歴史的な自国の領土への意識の強さが行き過ぎた防衛意識や拡大への執着につながったという点もあるのかもしれない、と語っていました。それが、政府によるプロパガンダの影響と言えるものなのかはわかりませんが、他の文化圏からは、明らかに不健全な拡大主義による国際秩序を無視した破壊行為に映るとしても、ロシア人にとっては全く異なる景色に見えているという理由をうかがい知ることができ、大変印象深く感じました。

個人的な話にはなりますが、私にとってアメリカでの生活は、子ども時代から合わせてこの夏で計7年目を迎えます。それでも現地の学生と同じようにアメリカの社会問題を捉えることは、容易ではありません。アメリカの土地に根付いた、人種や収入の格差といった問題を自分事として感じることは完全にはできないように思うこともあります。それはどうしても、差別の部分や各地域に根付く出来事の一つひとつが、そこで生まれ育った人の意見や常識を形成するからだとも、月日を重ねるごとに考えるようになりました。言い換えれば、どの文化圏にも、きっと他の場所で育った人には完全には見えない景色があるのだと思います。

同じように、私自身が日本文化の良さをアメリカ人に伝える際にも、アメリカで寿司と言えば「カリフォルニア・ロール」がイメージされるように、アメリカナイズされた表現でしか相手に伝わらないもどかしさもずっと感じてきました。漫画やアニメに登場するような日本の話では

ないと、なかなか相手にとってイメージしにくいときがあるのです。

そうした、創作されたフィクションを観て、日本の高校などの青春をうらやましく思うアメリカ人もいるようですが、彼ら彼女らが漫画やアニメでみたような、圧倒的権力を持った生徒会も実際にはほとんどなければ、些細な話で言えば、登場人物たちが屋上で語り合う場面のようには、実際の日本の学校生活ではそう自由に屋上に出入りするなんてことは出来ないというようなこともあります。

ただ、大切なこととして、私自身も「好奇心を持って」、いたってまっすぐに質問をぶつけてみることや、反対に他の国の人に日本について質問された際にも、最初は正確に伝わらなくても、できるだけ誠実に答え続けて、少しずつでも相互理解を深めていきたいと、改めて考えました。

■ビッグアリーナや他大学訪問―ちょっと楽しみなバンド遠征

私は昨年1月からペップバンドという大学のアイスホッケーやバスケットボールチームを主に応援するための吹奏楽部のような団体に入っています。普段はホームゲームの応援のみですが、リーグトーナメントの決勝、準決勝などの場合には相手チームのホームに向かうこともあります。

ペップバンドに参加してから約1年が経ち、試合の応援などでボストン大学以外を訪れることも増えたため、特に記憶に残った場所を紹介させていただきます。

【TDガーデン】

プロアイスホッケーチームのボストン・ブルーインズや全米プロバスケットボール協会（NBA）所属のセルティックスの本拠地で、人気歌手やバンドのコンサートでも使用される大変大きなアリーナです。

アイスホッケー部の試合のために年に何回か訪れますが、大学関係者以外の観客やプロリーグのための会場の規模に毎度圧倒されます。

去る2月10日には、ボストン周辺の4大学、ハーバード大学、ノースイースタン大学、ボストン・カレッジ、そして私が通うボストン大学が集うビーンポットというアイスホッケー・トーナメントが行われました。昨年は惜しくも決勝でノースイースタン大学に延長戦の末敗れましたが、今年は準決勝でハーバード大学に7対1で快勝し、決勝でも全米第1位のボストン・カレッジを下しました。

実は、ビーンポット大会の際に授業のため、他のバンドのメンバーよりも遅く到着したことがありました。その時、チケットを確認するスタッフが戸惑ったようで、最初はメディア関係者専用の入口に案内され、メディア関係者用入り口では別の入口から入るように指示され、最終的にはスタッフ用のエレベーターを使って入場するといったこともありました。期せずしてTDガーデンの裏側を見ることができて、大変興味深かったです。

その時は、バンド全体と会場に一緒に入れない場合でも、バンドのユニフォームを着て学生証を見せれば問題なく入れると大学側には聞いていたのですが、それぞれの入口で異なる指示をされ、そして各係がそれぞれの判断で臨機応変に対応して、ここでもアメリカの文化を体感しました。

ペップバンドの一員として、多くの試合を無料で見られるのは大きなメリットではありますが、TDガーデンには、あくまでバンドとして試合の応援をするためにしか行ったことがないため、いつかはプロチームの試合をゆっくり観戦してみたいなあと思っています。

【コルゲート大学】

ニューヨーク州にある名門リベラルアーツ大学です。こちらは女子バスケットボール部が、昨春、全米大学体育協会のリーグ内トーナメントの準決勝に出場した際に、ペップバンドとして応援するために、ボストンからバスで約4時間かけて向かいました。

リベラルアーツ大学とは、ボストン大学のような学部課程と同規模かそれ以上の大きさの大学院を擁する研究型大学と異なり、大学全体の学生数が少人数で大学院を持たない、もしくはあっても小さなものしかないことを特徴としています。

研究型大学では多様な学生との関わりを持てる一方で、研究を重視するあまり、学部生への教育がおろそかになりがちだ、という指摘もあります。リベラルアーツ大学では教職員数と学生数の比の差が小さいく、少人数でディスカッションベースの授業も多いと聞きます。

また、その名の通り、リベラルアーツ教育、つまり幅広い教養を身に着けることを目的とした全人教育に力を入れ、自分の専攻とは違う分野も学びやすくなっているようです。

ニューヨーク州にあるというと、都会をイメージするかもしれません。ニューヨーク市から車で4時間ほど北上したハミルトンという緑豊かな村にあり、キャンパスも池などがあり、のびのびとした環境に感じました。3月初旬だったにも関わらず、既に気温が温かく、なぜか蚊が飛んでいて、バンドのみんなで逃げ回ったのも良い思い出です。

到着から試合が開始するまでの間は、他のペップバンドのメンバーとともにキャンパス内を散策していたのですが、コルゲート大学の授業に紛れ込まないかという冗談も飛び出しました。ただ結局のところ、建物の間隔自体も広く、授業が行われていそうな場所すら、見つけることはできませんでした。

自然溢れるキャンパスや学生数の少なさなど、ボストン大学とはまるで対極のような大学だなあと感じました。

【コネチカット大学】

こちらはコネチカット州にある州立大学です。この3月、女子アイスホッケーチームが所属するホッケーイーストリーグの決勝が行われたため、バスで1時間半揺られて向かいました。残念ながら試合の開始まで時間があまりなかったため、キャンパスの散策はできませんでした。

アイススケートリンクの規模自体は小さいものの、充実した売店や会場を照らす青紫色の照明など、新しい施設ならではの魅力が感じられました。

ボストン近郊は、皆さんご存じの通り、学園都市で先に書いたハーバード大学やボストン・カレッジなどのほかにもマサチューセッツ工科大学やタフツ大学など、たくさんの名門大学があります。でも、普段過密スケジュールを送るアメリカの大学生活では、近郊の大学は知っていても、他の大学、ましてや他州まで足を運ぶ機会がないため、新鮮です。大学一つとっても、アメリカは広くてそれぞれ個性を持っていることや、学生のノリが同じだったり、学風のカラーが違っていたり、そんな当たり前のことを感じることができる遠征は貴重な機会になっています。